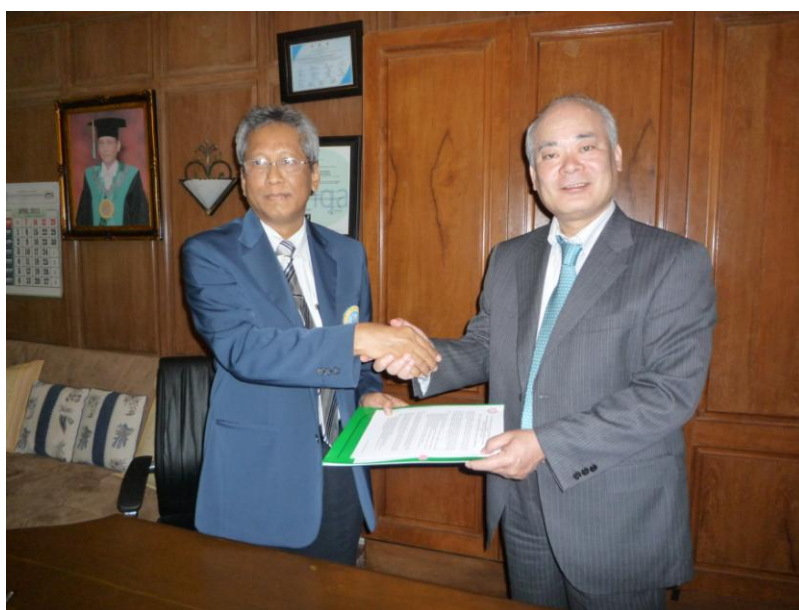


# インドネシア訪問記 (2013年4月14日～18日)

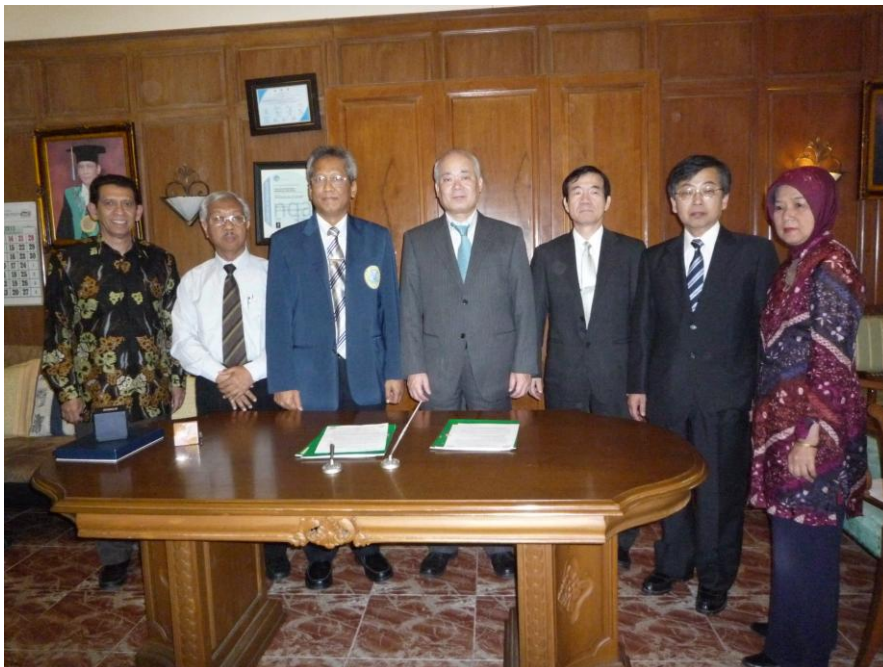
2013年4月18日  
国際交流委員会  
委員 石村栄治

## 1. アイルランガ大学(スラバヤ市)訪問 (4月15日)

アイルランガ大学は、ジャワ島東部の中心都市である人口500万人のスラバヤ市にある。インドネシアで第二番目に実力を持つ大学とのことである。脳神経外科の大畑教授との交流もある。また、2013年3月に国際糖尿病学会時に大阪を訪問された、Dean Professor Pranoto との交流もあった関係で、訪問前に学部間協定を事前に打ち合わせてあった。当日は午前9:00より、学部長室で、Pranoto 教授 (Dean)、Indri Mukono 教授 (Vice Dean、女性)、Professor Kuntaman、他、7人の教授と、荒川研究科長、大畑国際交流院長、石村で懇談をした。その後、両大学の合意のもと、協定書 (Memorandum of Agreement) に Pranoto 医学部長と荒川医学研究科長が相互署名して協定書を交換した。来年2014年から学生交換派遣を実施することで意見が一致し、Indri Mukono 教授が窓口となることとなった。



(協定書の調印)



(会談後の写真、医学部長室にて。左端の女性の Indri Mukono 教授 (Vice Dean) が交流の窓口になることになった)

その後、大学内を案内していただいた。アイルランガ大学は、1943年～1945年にかけて日本によって運営されており、ジャカルタ医科大学の碑文が壁に彫刻されてあったのは印象的であった (下記写真)。インドネシアは親日的である象徴かと思われる。



(1943年～1945年は日本の運営のジャカルタ医科大学であることが、壁に彫刻されている。)

その後 10:00-11:30 まで、大学講堂で、アイルランガ大学の教員、スタッフ、研修医など約 80 人の聴衆の対して、荒川先生（内視鏡治療など）、大畑先生（頭蓋底の手術など）、石村（腎臓内科の進歩など）がそれぞれ約 30 分の講演を行い、質疑応答をおこなった。

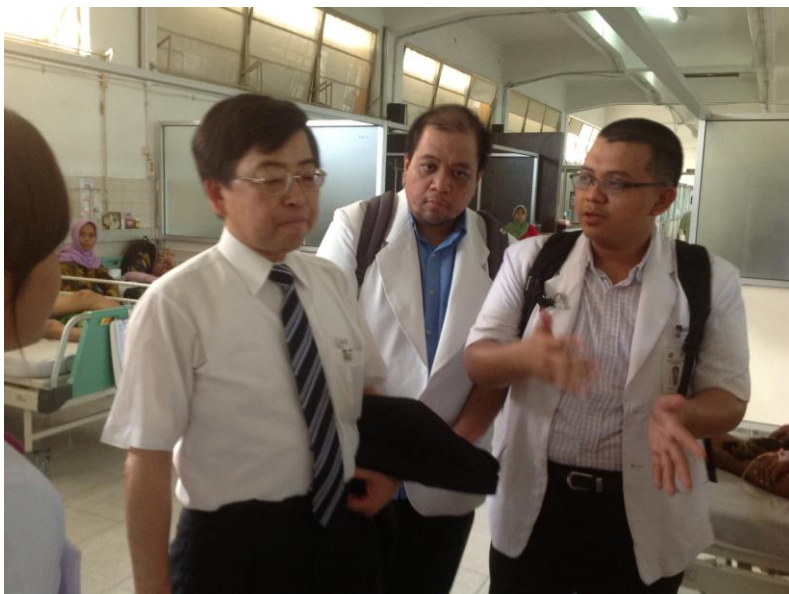
その後は、荒川研究科長は消化器内科、大畑教授は脳神経外科、石村は腎臓内科にそれぞれ分かれて見学した。腎臓内科は Dr, Pranawa 教授を中心に、スタッフ 2-3 人、レジデント（ローテータ内科医）、腎臓内科フェローが数人いるようであり、総数 15 人前後で診療担当しているようであり、女性が多い科であった。入院患者の 10-20%が腎炎、30%が高血圧、20-30%が腎障害（たぶん慢性腎臓病 CKD かと思われる、糖尿病性腎症も含む、透析導入も含む）、30%感染症や腎結石の腎障害（感染症の腎障害が多いのは熱帯を反映しているのかもしれない、腎結石を腎臓内科が担当しているのが意外であった）。入院患者病棟が内科病棟 3 か所に分かれており（病棟は、外科や内科などの混合病棟であった）、衛生面などがやや劣っており今後改善されていくものと思われる。腎生検は日本と異なり少なく、年間 10-20 例とのことであった。腎炎の治療状況は聞き取れなかったが、病棟回診をさせていただき、教授と話しフェロ

一と話したが、医療レベルはまだまだ、発展の余地があるものと感じた。現在透析ベット 25 床があり、約 80 人の透析治療も担当しているようであった。2014 年には 100 床を有する透析病棟が完成するとのことであり、現在は移転前の狭いところにあり、清潔度がやや劣っていた。透析機は日本のニプロ社製のものが使用されていた。日本では、糖尿病性腎症透析患者で Hb A1c を毎月計測し、私の研究結果を講演したが、当地では HbA1C の測定は頻回になされていないようであった。



(訪問時に腎臓内科のミーティングがあり、上記写真が腎臓内科担当のスタッフとローテート内科レジデントである)





(病棟で、患者紹介をする腎臓内科フェロー。糖尿病で透析導入となった患者さんの目標 HbA1C を質問された。彼らの病院では HbA1C を頻回に測定しないとのことであった。病棟は衝立を立てた大部屋であり、それぞれの患者に家族が付き添っていた)。

13 : 00 より、歓迎の昼食会に招待いただき、当方 3 人、Pranoto 医学部長を含めて 10 名の先生方と昼食をともにして、懇談した。

## 2. ガジャマダ大学(ジョクジャカルタ市)訪問 (4月16日)

ジョクジャカルタ市はインドネシアの中央部に位置しており、周辺地域をいれて 300 万人の人口を有する、インドネシアの古都である。そこに位置する、ガジャマダ大学はインドネシアで最も古く開設された大学であり、ガジャマダ大学曰く、インドネシアで最も実力を持つ大学とのことである。ガジャマダ大学は敷地が広く、公園のようなゆったりしたキャンパスを持つ。当日朝 8 : 00 に医学部長室を訪問し、医学部長 Aryandono 教授、Adi Utarini 教授などガジャマダ大学 5 人の教授と懇談し、今後、両校の相互交流の可能性につき、討議した。ガジャマダ大学では、ヨーロッパ、東南アジア、オーストラリアより毎年医学生を受け入れており、大阪市大医学部からの学生を受け入れる実現性が十分にあるとのことであり、また逆にガジャマダ大学から大阪市大への派遣も十分にある、とのことであった。今後、協定書の作成を進めることを確認した。



(医学部長 Aryandono 教授と荒川医学研究科長)



(医学部長室での会談終了時の記念撮影。左端の Carla Marchiara 教授が、国際医学生交換派遣の担当をされているとのことであった)

その後、医学部長室で、荒川医学研究科長、大畑教授、石村のそれぞれが、約 20 分間、各専門分野の日本の医学医療の進歩につき、講演をした。

その後、生化学を専門としている Sadewa 先生とともに、医学教育棟、基礎医学研究棟を案内していただき、医学研究、医学教育を紹介していただいた。ガジャマダ大学は熱帯にありデング熱の研究に精力的に取り組んでいることも紹介された。インドネシアの6年間の医学学生教育は、最初の4年間で医学部教育して OSCE を3年生、4年生時に行い、OSCE をパスして臨床研修を行うようである。Gadjah Mada 大学の最初の4年間の学生教育では、講義がほとんど無いようであり、小グループ（10人ぐらい）での実習教育、Skills 教育を重視しているようであった。特に、マネキンを用いた各種 Skills の研修に力を入れている様子うかがえた（下記、写真）。また、図書室などで学生各自が自習に励んでいるのが印象的であった。当大学の講義の多いシステムは再検討の必要があるように思われた。各研究室の様子は日本の研究室によく似ていた。



（産婦人科の Skills 実習用のマネキンを説明する担当教員。講義を大幅に少なくして、このような小実習室がたくさんあり、医学教育しているようである。）

その後、附属病院（Educational Hospital）を内科（荒川医学研究科長、石村）と脳神経外科（大畑教授）に分かれて案内していただいた。内科病棟は各専門分野の患者が混合して入院しているようであった。病棟は大部屋、個室（料金があるようである）になっており、レジデントや学生が指導教官とともに回診

していた。原則的に空調が整っておらず、暑い状態であった。また、患者家族が入院患者に付き添っており、その面では、看護師などスタッフが日本ほど充実していないのかもしれない。また、女性医師が多いのが印象的であり、医学部学生の半数以上は女性とのことであった。



(病棟の研修医。女性医師が多い。)

透析室を見学させていただいた。30床の透析ベッドを2クールで回しており、約80人の透析患者を治療しているとのことであった。透析機は中国製であるのに驚いた。日本製よりはるかに値段が安いと、看護師長の説明であった(看護師長が流暢に英語を話すのも驚いた。「あなたは医者ですか」、との問いに、「看護師である」、と透析の説明を英語で説明していただいた。)

### 3. 両大学訪問の総括的印象。

両大学とも、腎臓内科医療の面では、まだまだ、発展途上である。腎炎の診断と治療も発展途上(そもそも腎生検が少なく、正確診断がなされていないような印象である)、保存期腎不全管理が不十分(というより、腎不全の診療が紹介医でなされていない、腎不全発見時には既に透析導入という、かなり深



刻な状況である)、透析医療のレベルも発展途上である(合併症に対する対策の不足、検査フォローシステムがない)。両校からの医学生、研修医、スタッフを当大学に受け入れれば、大きく役に立つと考えられる。

しかし、医学教育は積極的に改善しているように見受けられる。自習と実習を重視しているのが印象的である。

当大学から、医学生を派遣するなら、2年生~4年生ぐらいがよいのではないかと私見します。医学医療を学ぶ5年生より、むしろ、Early Exposure for International Medicine という面で2年生、3年生、4年生を派遣するのが、よいように思われます。何よりも意思伝達に英語を実践的に使用せざるを得ず、国際語である英語の実践勉強にメリットである。また、親日的なインドネシアの現地学生との交流は今後の両国の友好にとって有益とも考える。

#### 4. ERIA (Economic Research Institute of ASEAN and East Asia) 訪問 (4月17日)

4月17日には、急遽予定を入れて、ERIAを訪問した。ERIAは経産省の支援のもと、ASEAN各国と日本とが設立した研究機関であり、ASEAN各国の諸経済活動と経済発展の計画と実施を行っており、数兆円規模の予算額を持つ施設である。当日、午後、ERIA総長の西村英俊氏と急遽会談の予定を計画させていただいた。西村総長より、ERIAの活動実績と、医療医学分野でのASEAN諸国との交流の発展の可能性などにつき、討論した。たった数日のインドネシア滞在であったが、海外で久しぶりにみた、日の丸の国旗が印象的であった(私自身は右翼人間ではないのですし、日本では日の丸国旗が印象的と思うことは決してないのですが、海外では日の丸をみると私も日本人である identity を感じさせられる。前日には、ジャカルタ滞在の日本の建設企業の社員と会食して、日本人が海外で苦勞して活躍しているのを見分したせいかもしれない)。



(西村 ERIA 総長と、荒川研究科長)



(西村 ERIA 総長と訪問 3 人)